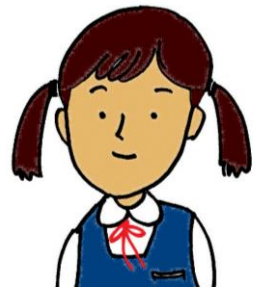


## 事例5： 小学校～中学校 特別支援学級に在籍するEさん（中学校1年生）

保護者や本人の願いに沿い、継続して話合いの場を持つことで、本人への必要な支援について保護者の理解が得られ、個別の教育支援計画の作成と活用につながった事例です。小学校から中学校への引継ぎでは、小・中学校のコーディネーター同士が連絡を取り合い、保護者の安心が得られるようにしました。個別の教育支援計画の作成においては、関係者間で、保護者や本人の願いを踏まえた目標や支援内容の検討が行われ、関係者の共通理解と役割分担による支援につながりました。

### <生徒の実態>

- 知的障害特別支援学級に在籍する中学1年生の女子です。
- 挨拶や日常的な会話ができます。自分から積極的に活動することは少ないのですが、経験を通して身に付いたことは几帳面にやろうとします。
- 学習面では、ゆっくりと時間をかけたり、繰り返し練習をしたりすることで、できることが増えてきています。
- 細かい手指の操作を必要とする作業が難しく、イライラすることがあります。ちょう結びや小さいボタンはめは援助が必要です。
- テレビを見たり、絵を描いたりすることが好きで、テレビのキャラクターの絵などをよく描いています。美術部で楽しく活動しています。
- 料理に興味があり、簡単な料理を母親と一緒に作るがあります。頼まれると手伝いも喜んでします。



## 1. 個別の教育支援計画作成までの経緯

### 小学校での支援

☆ 担任等が、保護者の思いに沿いながら、時間をかけて信頼関係を築くように努めました。保護者の気持ちに変化が見られ、本人の気持ちや実態を考慮し、特別支援学級への入級が決まりました。

- Eさんは、小学校低学年の頃から学習面や生活面の支援が必要で、担任が個別に配慮をしてきました。担任は、普段の連絡や個人懇談で、Eさんへの配慮点などについて共通理解を図ってきました。
- 中学年になると、学校生活において消極さが目立つようになりました。家庭では、朝、なかなか起きなかつたり、登校を渋って休んだりすることも見られるようになってきました。
- コーディネーターや管理職が保護者の相談に応じるとともに、Eさんに合った学習の場として特別支援学級について情報提供を行いました。しかし、保護者は、通常の学級の友達と一緒に生活させたいという思いが強く、入級には至りませんでした。
- 6年生になり、担任と保護者が、本人の社会生活を考えた話合いの場を持ちました。その中で、保護者は「特別支援学級で生活力を高めていきたい。」と話し、中学校からの入級を前向きに考えるようになりました。体験入級を通じて本人の気持ちを確認した上で、特別支援学級への入級が決まりました。

### 小学校からの引継ぎ

☆ 小学校と中学校のコーディネーターが連絡を取り合い、引継ぎを行いました。  
☆ 中学校の授業体験などを行うことで、本人と保護者は中学校生活に見通しを持ち、安心できました。

- Eさんの場合、個別の指導計画や個別の教育支援計画が未作成であったため、引継ぎは、保護者の了解を得た上で、コーディネーターと担任が小学校での様子や配慮事項等をまとめ、学校間で直接話をする機会を持ちました。
- 中学校の授業にEさんと保護者が参加し、中学校の先輩や先生と話をしたり授業を体験したりしました。保護者の質問の場も持ちました。

中学校の様子が分かり、中学校生活への期待が持てました。

中学校生活を送る上で不安な点などの質問に答えてもらい、安心しました。



中学校における  
校内支援体制作り  
保護者全体への理解・  
啓発

- ☆ 中学校では、**学年部**の話し合いや全員参加の校内委員会で、教職員の共通理解を図っています。
- ☆ **保護者全体への説明**や相談窓口の周知を行うよう努めています。

- 中学校では、生徒への支援について、学年部での話し合いや、全教職員参加による校内委員会で共通理解を図りました。
  - ・ 各学年に特別支援教育の担当者を置き、連絡や話し合いがスムーズに進むようにしています。
  - ・ 1年生を対象に、チェックリストや自作の基礎学力テストを基に実態把握を行い、支援の必要な生徒について共通理解を図りました。

- 全体の保護者に対する理解啓発は、PTA総会での特別支援教育の取組紹介や相談窓口の紹介、各種研修の案内など、いろいろな機会を利用して行っています。
- 保護者からの相談に対しては、コーディネーターと生徒指導主事が連携して対応しています。



コーディネーター

コーディネーターによる教育相談に加えて、生徒指導主事を窓口としたスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、ハートなんでも相談員、中一ギャップ担当者への相談についても文書で案内しました。

個別の教育支援計画に  
関する教職員の理解

- ☆ コーディネーターは、**教職員の理解を得て作成を進める**ことが必要だと考えました。
- ☆ まず、**特別支援学級の生徒を対象**に作成を行い、その後、**通常の学級の生徒の作成へと広げる**ことにしました。

- 個別の教育支援計画の作成と活用を進めたいと考えていたコーディネーターは、生徒指導主事、管理職と話し合い、保護者や教職員全体の理解を得るため、個別の教育支援計画の意義について説明する場を持つことにしました。
- 実際の作成では、作成の対象を絞り段階的に進めることにしました。まず、特別支援学級の生徒を対象に作成を行い、その後、通常の学級に在籍する支援が必要な生徒に広げていくことにしました。



生徒指導主事

コーディネーター

このような段階を考えて作成に取り組むことにしました。

- 1 特別支援学級の生徒
- 2 通級による指導を受けている生徒
- 3 関係機関との連携が必要な生徒

関係教員や  
対象生徒の保護者への  
説明

- ☆ **作成に携わる教員**に具体的な進め方について説明をしました。
- ☆ **特別支援学級生徒の保護者**に対して説明を行いました。質問に対して丁寧に答え、同意を得ました。

- コーディネーターは、作成に携わる特別支援学級の担任に、個別の教育支援計画を作成することについて説明し、共通理解を得ました。
- 特別支援学級生徒の保護者全員を対象に、参観日を利用して、個別の教育支援計画を作成する趣旨や活用の仕方について説明しました。説明に当たっては、個別の教育支援計画について説明されたパンフレットを使用しました。
- 保護者の一人から、「利用している機関がない場合はどうしたらよいですか。」という質問が出ました。コーディネーターは、日常生活で関わっている人を関係者にとらえ、その中から、個別の教育支援計画の作成や活用に携わる方を相談して決めていくということを説明しました。
- Eさんの保護者は、個人情報が多くの人に知られてしまうのではないかと、不安を感じていました。そこで、コーディネーターは、保護者が必要だと思う関係者に限定すること、関係者への情報提供は必ず保護者の了解を得て行うことを説明しました。これにより保護者が安心し、同意を得ることができました。



**留意点：**保護者が初めて個別の教育支援計画についての説明を受けた場合、それがどのようなものかと疑問点を持ったり、作成に対して不安感を持ったりすることが予想されます。疑問点に対しては丁寧に説明をするようにし、すぐに回答を求めずに時間をかけて考えてもらうようにすることも大切です。特に、個人情報の取扱いについては、十分に説明を行う必要があります。

## 2. 個別の教育支援計画の作成

### 個別の教育支援計画 (案)の作成

- ☆ 担任とコーディネーターが保護者と連絡を取り合い、**(案)を作成**しました。
- ☆ 願いの把握、実態の整理に加え、個別の教育支援計画作成に携わってもらう**関係者をピックアップ**しました。
- ☆ 校内委員会で話し合った後、**支援会議**に諮りました。

1 Eさんと保護者の、生活全般に関する願いと希望を把握しました。



勉強を頑張りたい。  
仲のいい友達を作りたい。

買い物などの生活の力を高めてほしい。  
いろいろな人と関わって過ごしてほしい。



2 コーディネーターは、保護者と個別の教育支援計画の作成に参画する関係者について確認しました。

関係者として、現在、週に1回利用している家庭教師や、普段利用している近所のスーパー、歯科医院、小児科医院、小学校などの関係者が挙げられました。そのうち、家庭教師、小学校6年時の担任とコーディネーターに支援会議への参加を依頼しました。

3 担任とコーディネーターが関係者と連絡を取ったり、保護者に連絡を取ってもらったりして、支援内容等について情報収集しました。

家庭教師からは、学習の進め方についての悩みが聞かれ、支援会議で話題にすることにしました。

4 担任とコーディネーターが保護者と話し合い、個別の教育支援計画(案)を作成しました。

愛媛県教育委員会の様式を使用して作成しました。

5 校内委員会で個別の教育支援計画(案)について検討し、支援会議に提案しました。

### 支援会議

- ☆ 出席者がEさんとの関わりの**状況を報告**した後、**本人と保護者の願い**を基に、**目標と支援の役割分担**を決めました。

- 支援会議は、2学期の放課後の時間を設定しました。コーディネーターが進行役をし、最初に、各参加者が、簡単な自己紹介を行い、Eさんとの関わりの様子や配慮している点などについて報告しました。保護者からは、現在の願いや将来に関する願いが話されました。
- 保護者の願いを踏まえ、中学校卒業段階を想定して、目標や各関係者が行いたい支援内容について意見交換を行いました。
- この支援会議を通して、関係者間で共通の目標を挙げ、支援に関する今後の見通しを持つことができました。
- 最後に、個人情報の取扱いや次回の支援会議の開催時期(2年生の1学期)を確認し、関係者で行った支援に関する評価を持ち寄ることとしました。

### <支援会議の参加者>

- ・担任、交流学級担任  
学年主任  
部活動顧問  
コーディネーター
- ・保護者(両親)
- ・小学校6年時の担任  
コーディネーター
- ・家庭教師

学校では

体験的な学習を通して、生活面のスキルや社会性を高めたいです。

生活に必要な力を高めることや、身近な人との関わりが広がるようにすることを目標にするとよいですね。

家庭教師は

実際の生活に活かせる基礎学習を行いたいです。

### 支援会議での話題

美術部の活動を楽しみにしています。自信や友達との関わりにつなげたいです。

休日の過ごし方を考えてみたい。近所の人との関わりも広げたいです。

家庭では



### 3. 個別の教育支援計画の活用

#### 学校、家庭での支援、関係者による支援

- ☆ 学校では、**個別の指導計画を作成**し、学習や部活動場面での支援に取り組みました。
- ☆ 家庭では、休日を利用して、**調理や買い物の経験**が増やせるようにしました。
- ☆ 家庭教師は、**今後の生活につながる、本人に合った教材を工夫**しました。

- 学校では、支援会議後、担任、コーディネーターを中心に校内委員会で個別の指導計画を作成しました。支援会議で話し合われた目標を踏まえて、学習面や部活動のことに焦点を当て、中学校1年生で取り組む目標を設定し、指導内容を検討しました。
  - ・学習面では、教科学習や生活単元学習、作業学習の中で、Eさんが自信を持って人とのやり取りができることや生活上のスキルが高まるよう内容を検討しました。また、生活単元学習において、買い物の機会を設けて、食材の選び方、メモの仕方、買い物時のやり取り、金銭管理などの学習を行い、社会生活と対人関係のスキルが身に付くように取り組みました。
  - ・部活動では、絵を描くことを楽しめるように働き掛けるとともに、周囲の生徒の理解を得ながら、良好な友達関係が持てるよう配慮しました。
- 家庭では、興味のある調理を生かして、母親と献立を考えたり、スーパーでの買い物を一人で行えるように練習を行ったりしました。保護者は、スーパーのかたに、必要に応じた支援をしてもらえるようお願いをし、理解を得ました。
- 家庭教師は、本人の理解力に応じたお金のやり取りを課題とした教材を精選し、スモールステップで学習を進めました。

#### 支援の成果

- ☆ 関係者それぞれが、**目標を踏まえた支援**内容を考えてEさんと関わりました。
- ☆ Eさん自身にも、**毎日を楽しむ様子や積極性**が生まれてきました。

- 各関係者は、個別の教育支援計画の作成を通して共通理解を図ることができました。また、それぞれが目標を踏まえた支援内容を考えてEさんと関わりました。
- 最初は、個別の教育支援計画を作成することに不安を感じていた保護者も、関係者の協力を得て、安心してEさんと関わるできるようになりました。また、Eさんが生き生きと登校する姿を喜び、家庭でもできることを考えて取り組むようになりました。
- Eさん自身も、部活動を通して共通の趣味の友達ができ、休日には、一緒に図書館に行って本を見るなど関わりが広がりました。生活の楽しみが持てるようになったことで、積極性も生まれてきました。

Eさんは、現在、学習や生活において、楽しさや満足感を感じながら過ごしています。保護者も本人の成長を感じています。ただ、将来のことを考えると、学校卒業後の進路など心配な面がなくなったわけではありません。引き続き、その時々課題や気になることについて、継続して話し合っていく必要があります。新年度に予定している支援会議では、各関係者が取組の成果や課題を報告し合い、目標や支援内容を見直す予定です。

